



みらい建設工業株式会社
執行役員 九州支店長

野村 信二 さん
のむら・しんじ

1981年大分県立日田林高等学校土木科卒、三井不動産建設(現みらい建設工業)入社。20代から50代まで鋼管矢板井筒基礎を主とした河川や港湾での橋脚築造工事に従事。2022年4月から現職。大分県出身、60歳。

あの頃、 思い出の現場

豊浜小戸線橋梁架設工事
(西福岡マリナ大橋)

現場での **トラブル**
対応 が **礎** に

大分県内の高校を卒業後に入社して8年目、26歳の時に工事主任として、第3セクターの博多港開発(株)(福岡市博多区)より発注した「豊浜小戸線橋梁架設工事」の現場に配属されました。姪浜地区の埋め立てに連動したもので、福岡市西区の姪浜と小戸を結ぶこの橋梁は「西福岡マリナ大橋」と呼ばれています。自分にとってはその後数多く携わることになる橋梁工事の最初の現場となりました。パソコンが出始めた頃で、構造物の座標計算も手計算で行うなど現場に必要なことを一から学ぶ時代でもありました。



現在の西福岡マリナ大橋

工事は1989年から2期に分けて行われました。海中に建てる2本の橋脚は、鋼管板を打ち込み締め切った中で施工しました。

一つ目の橋脚基礎の下部で測量を始めようとした矢先にボイリングが発生しました。基礎となる部分に水みちがで、突然砂が噴き出す現象です。最初は何が起きたか分からず、作業員と慌てて地上に待避したことを昨日のこのように覚えています。

このトラブルの対策には、現場や建設コンサルタントと相談した上で地盤を固める薬液注入を取り入れました。1カ月ほどを費やした対策を経てボイリングが発生しないことが確認できた時、「自分たちが考えた対策で間違いなかった」と胸をなで下ろしました。

水中の工事は、湧水対策をいかに行うかが決め手となります。複数の工程を並行して進められないので、工程を一つずつしっかり完了させて積み上げるしかありません。このことを学べたことは、その後の現場での取り組みの礎になったと思っています。

2本目の橋脚は、トラブルに見舞われることなく、順調に工事を進めることができました。現場に携わっている時に結婚しましたので、個人的にも思い出深い工事になりました。

入社して約40年。その多くの期間を橋脚基礎の工事現場に従事してきました。最初の大型現場で遭遇したトラブルに対応した経験から「終わらない工事はない」とモチベーションを下げることなく、突き進める思いを持てるようになりました。

西福岡マリナ大橋の後に携わった橋梁工事は、「鋼管井筒」基礎を採用した現場が多く、そのスペシャリストであると自負しています。鋼管井筒基礎工事があれば、九州以外にも出向いてきました。遠いところでは秋田市内で施工した「臨海大橋」などがあります。

基礎をより深い場所に打つ鋼管井筒の施工では盤ぶくれ、継ぎ手からの漏水などさまざまなトラブルが発生しました。それでも最初の現場での経験が生かされ、慌てず対応することができました。建設工事の施工方法はAIなどデジタル技術の革新もあってずいぶ

んと進化していますが、経験がものを言う各種トラブルの対応は、デジタルだけに頼ることはできません。騒音、振動も発生するので近隣や漁協の皆さんとの信頼関係を築くことも欠かせません。苦勞した分、完成した時には大きな達成感を得ることができます。

若い人たちにはトラブルが発生した時に「自分ならこうする」ということをまずは考え、その上で上司に相談することが大切だと常に言っています。



工事主任として従事した現場で